

独裁国家からの脱出

会員 佐藤 佑樹

1 はじめに

私は、旅が好きである。ペンで地球儀に訪れた国を塗り潰してみたら、黒と青の不思議なオブジェが出来上がるほど旅をしてきた。様々な物事を見て、感じて、巻き込まれて、糧としてきた。

ここでは、旅の中で遭遇した印象深い出来事の一つについて書こうと思う。

2 某国にて

これは、私が、独裁国家とされる某国へ入国（適法）を試みた時の話である。

ある日の早朝、私は、某国へと向かう列車に乗っていた。代わり映えしない景色にも飽きて微睡んでいた時、何者かに突然肩を揺らされた。顔を上げた私の前には、自動小銃を持った2人の軍人が立っていた。何故か列車は停まっていた。

彼らは、聞いたことのない言語で捲し立て、私の身体検査を始めた。ポケットから発見したパスポートを一瞥すると、すかさず私の首根っこを掴んだ。状況もわからないまま、私は列車を降ろされた。

彼らに挟まれながら暫く歩くと、無機質な建物に辿り着いた。その中に入り、暗い廊下の先にある部屋へと通された。妙な傾斜のついた椅子、小さな机、鉄格子の嵌った窓、銃を持つ見張り。他には何も無い。映画で見た拷問部屋のようなと思った。

一刻も早く脱出せねば。穏便に、且つ早急に状況を脱するための考えを巡らす。

そこで一つの最適解に辿り着いた。

“無害だと思われよう”

捕らえておく価値すらなく、むしろ可哀想になるほど無害な人物であると思われることで、解放されるのではないかという浅はかな作戦である。

善は急げ。見張りに対し、カタコトの英語に日本語と笑顔を交ぜて話しかけてみた。すると、彼は迷惑そうな素振りを見せてきた。

いきなり雑談から入るのは不作法だったかと思い、切実にお手洗いへ行きたい旨を伝えた。今度は気持ちに通じたのか、彼はお手洗いへと案内してくれた。満面の笑みで感謝を伝えたところ、意外にも彼は笑顔を返してくれた。

その時、これはいけるのではないかと考えた。

拷問部屋（仮）に戻った後、色々と話しかけてみたところ、彼も母国語らしき言葉を返してくれた。全く理解出来なかったが、おそらく故郷の話をしてくれたのではないかと思う。途中、何度か年配の軍人がやって来ては、会話に混ざることもあった。

気付いたら、私たちは仲良くなっていた。

暫く語り合った頃、見張りは年配の軍人に呼ばれてどこかへ行ってしまった。

私は、見張りのいない部屋で暇を持て余した。

ようやく見張りが戻ってきた。年配の軍人と体の大きな軍人も一緒である。

拷問部屋（仮）に3人の軍人と私。

客観的に見れば、これ以上に最悪な状況はない。しかし、不思議と嫌な予感はいなかった。

見張りが何かを告げ、歩き出した。彼らに付いて行くと、建物の外に出た。更にひとしきり歩くと、列車が見えた。年配の軍人からパスポートを渡され、乗車するよう告げられた。最後に、彼らは笑顔で見送ってくれた。

呆気なくも、私は元いた国に強制送還され、某国から脱出することが出来た。どうやら浅はかな作戦は成功したようだった。

3 おわりに

このように、時に難事に出くわすこともあるから、旅は面白い。最後まで読んで下さった皆様が、同様の場面に遭遇した時、この話が少しでもお役に立てば幸いである。